

平水左附
挿繪入

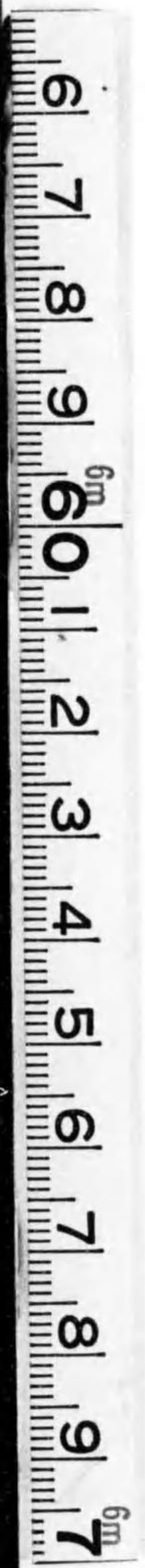
往生要集中

特 258

86

32

33



始



特 258
86

554

惠
心
僧
都
述

往生要集中之卷



正林堂書房發行

正林堂書房發行

正林堂書房發行



身一豚鬼たの度





才三修羅の姿



才三高生の姿



分一物花相

噉食相

古墳相

骨散相

世世要集卷之七



世世要集卷之七

仙人界



名教魁





天の道



弁天の歌相



あまのつとむるのつとむる



隠士術の事

往生要集卷之中

六道物語

第一 餓鬼道の事

夫れ餓鬼道と云ふは住所二つ有り。一つは地の下五百由旬にあり。閻魔王界なり二つには人天の間にあり。其様甚だ多ければ今茲に少分を明すなり。或は身の丈一尺。或は人の丈の如く。或は千瑜繕那或は雪山の如し。或は餓鬼あり。鑊身と名づく其身大きに丈高く人に過ぎたる事二倍なり。顔も無く、目も無くして手足鼎の如し。炎みちくして其身を焼きこがす。これは昔寶を貪りて人を焼き殺したるもの此むくひを受るなり。又或は

餓鬼あり。食吐じきど名づく、其身そのみかうだい廣大にして長半由旬たけはんゆじゆんなり。常に胸腹むねはらつかへもだへて吐はき出ださんこそを求めて色々いろくくろ苦しめ共吐どもはく事ことならざるなり。是これは昔むかしあるひを、或あるひは夫をにして自みづからのみ美食びしよくを食くらひて妻子さいしに與あたへず、或あるひは女房にようぼの自みづから計かり喰くらひて夫をに與あたへざるもの此このむくひを受うくるなり。又またあるひ或あるひは餓鬼がきあり食氣じきけこ名なく、世よの人のやまふによりて水みづの邊ほとり林はやしの中なかにて祭まつりを設もうくる時ときやうく此この食物じよくもつの香かをかいで命いのちをつなぐなり。是これは昔むかしさいし妻子さいしなごの前まへに於をいて我われ一人ひとり美食びしよくを食くらひしもの、此この報むくひを受うくるなり。又またあるひ或あるひは餓鬼がきあり。食法じきほう名づくな礮けわしく行ゆきがたき所ところをも走はしり廻まわりて食求じきもとむむれ共ども、更さらに求もとめ得えず。若もし寺道じどう場ばに至いたり。經陀羅尼きやうだらにせつぼう說法ぼうあれば其功そのくりき力を得えて命いのちを次つぐ。是これは名利みやうりを貪むさぼりて不淨ふじようせつぼう說法ぼうしたるもの此この報むくひを受うくるなり。又またあるひ或あるひは餓鬼がきあり食水じきすい名づくな。

水みづにかつて身みを焦こがし。あわてさわぎて水みづを求もとむれ共ども。露つゆばかりも求もとめ得えず。髪かみは長ながくして面おもてを覆をへば目めに見みる處ところなし。川かわの邊ほとりに走はしり趣おもむき、若もし人河ひとかわを渡わたり足あしのしづくの落おちける殘のこり水みづを其儘そのまゝ早はやく納をさめ取とりてやうく咽のどをうるほし命いのちをつぐ。或あるひは人の水みづをむすびて死ししたる父母ちちはに手向たむくる折をりふし少すこし計はかりを得えて命いのちをつぐ。若もし自みづから水みづを取とれば水みづを守まもるもろくの鬼おにごも杖つえを持もつてさんぐに打うつ。是これは昔むかし酒しけを賣うるに水みづを加くわへ。或あるひはみづびるをしづめよき法ほうをつごめざるもの此この報むくひを受うくるなり。又またあるひ或あるひは餓鬼がきあり怖け望もう名なづく。世よの死ししたる父母ちちはの爲ために祭まつりを設もうけ供養くやうするごき是これを得えて喰くらふ其外そのほか悉ことごとくく喰くらふ事ことならざるなり。是これは人の苦勞くろうして少すこしの物ものを得えたるをたぶらかしまごわしてより用もちひたるもの、此この報むくひを受うくるなり。又また餓鬼がきあり

海の邊りに生れたり涼しき木かげ河水なごある事なく、其處甚だ熱くして冬の日も人間の夏にくらぶるに。千倍過ぎたり。唯朝露を以てからき命をつぐし、海の邊りに住むと云へ共、此餓鬼の目には海も悉く枯れかわくご見ゆるなり。是は昔道行人やまひにつかれたりしに、其賣物を欺きとりて價を少し興へたるもの、此報ひを受くるなり。又或は餓鬼あり元より食物を求め得ざれ常にさんまい墓原に至りて焼き焦かしたる志かばねを喰ふ。され共猶心にたれる事なし。是は昔牢の番をして科人ごもの食物を押へ取りて食ひしもの、此報を受くるなり。或は餓鬼あり植木の中に生を受けて大木ごもに押へつめらる事木賊はこの如く、大苦炎を受く。是は昔涼しき森林の木を切り、又寺林の木を切りたるもの、此報ひを受くる

なり。又餓鬼あり。頭の髪たれ下りて普く身をまごひ其髪釵の如くにして身を切りさき、或は變じて火焰ご成りて其身を廻りて焼焦す。又或は餓鬼夜晝子を五人宛生めり。生むごひごしく此子を食ふ。しかあれご猶常にごもし。又餓鬼あり。一切の食を食ふ事ならざれば、唯自ら頭を破り惱をさりて食ふ。又或は口より火を出し蛾ご云ふ虫の飛んで火に入るを食ごする餓鬼もあり。或はうみ血をかすはき糞土の洗ひしるの残りを食ふ餓鬼もあり。又外のさわりあるにより食する事を得ざる餓鬼もあり。其れを如何ご云ふに飢へかわく事常にしきりなれば、其身やせかれてあわれに力をくよろくごして長閑なる春の風にも倒れるべし。たまご清き流れを望み見て走り向ひ手にむすびて飲まんごすれば、大力の鬼黒鉄の杖を

以て打ち。或は此水たちまちに火焰となりて身を焼き、或は即ち流れも盡き水かわけり。或は内の障りによりて食する事を得ざる餓鬼もあり。それを如何に云ふに腹は大山の如くなれ共、口は針のみ、ずの如くなれば例へ飲み食ふ物にあへども是を食わんとするによしなら。又内外の障りなれ共食物を用ゆる事を能はざる餓鬼もあり。偶々少しの食に合ふて之を食ふとすれば、ひこしく變じて猛火となり。うちより身を焼きて燃へ出するなり。斯くの如く、各々の種々にそれらの報ひによつて餓鬼道の苦しみ經る事、人間の一月を以て一日一夜として壽命五百才なり。正法念經に曰く、慳貪嫉妬のもの餓鬼道に落つと説き給へり。慳貪と云ふは、我物をば露ちり程もをこみて、人を愛む物を施す事なく人の物をば貪りて、あ

げる心なきを云ふ。さる程に佛の教にも少慾ならん事を速へ給へり。小慾は少しのものを得ても心に足りぬると知る事なり。如何に況んや心いたりぬれば疏食を食ひ水を飲み、ひちをまげて枕ごし。樂しみ其の中にあり云へり。嫉妬と云ふは、人をにくみねたむ事なり。餓鬼道の報ひを恐れ心廣く隠かにして人の惡を責めず、我誤りを改めなば嫉妬の思ひなくして常に心安かるべし。

第二 養生道の事

其れ養生道は其住所二つあり。根本は大海に住み未々は人天にまじわれりこまかに分れば三十四億の類あり。すべて合せて云へば三つを出す。一つ

には鳥の類、二つには獸の類、三つには虫の類なり。色々の畜生害心をふくみて小さきものは太きものに吞まれ、弱きものは強きものに食われ、互に惨害の苦しみ夜晝とばかりもやすき暇なく、常に恐るゝ心あり。況んや又諸々の水に住む類はすなごるものに殺され、諸々の陸を行くものは獵師に命取らるゝなり。馬牛象などの如きものは、或は黒鉄の内に鍵を以て其のなづきにうちかけられ、或は鼻をうがち通され、引づり廻され、或はくつわを口にはませ、常に重荷を負はせられ、むちづかひを以て打たるゝ事暇なし。只水を思ひ、草を願へごも心に任せず。又蚰蜒鼠狼のたぐひは闇の内に生れて闇の内に死し、蚤虱の類は人の身に生じて人に殺され、又諸々の龍の類は夜晝三熱の苦しみを受けて止む事なし。或は又蟪

蛇は、其の身大きに丈長く聳其心かたく足なくしてわだかまりまろび腹にてあるく、此故に諸々の少さき虫吮さし食ふ事ひまなし。或は又窓に立つみじんの如きものもあり。或はうの毛を百千に割りたる程のものもあり。或は一万由旬の如きものあり。斯の如くに品々の畜生、或は一時の間、或は七時、或は一切乃至百千万億を経て無量の苦を受くるなり。是は愚知無慚にして、徒らに人の信施を受て其施をもつくなわざるもの、此報ひを受くるなり。

第三 修羅道の事

夫れ修羅道をあかすに二つあり。根本のすぐれたるものはしゆみせんの北

大海の底に住す。すゑにのをとりたるものは四大州の間、高き山岩の中にあり。若しいかづちのなるときは天のせめつづみと思ひ、慌てさわぎて心大きに驚きいたむ、又常に諸天と戦ひて、さんぐにをかゝ害せられ、身体をやぶり、其の命を失のふ。又毎日夜三度晝三度の修羅の戦ひをめきさけぶ。其聲は百千のなるかみの如く、互に切りつ切られつ身を通し骨を碎き流るゝ血くれないの波みなぎりてたてをながす。又兵具をのづからきたりて其身を責め害をなす色々の苦しみ數ふべからず。

第四 人道の事

夫れ人道をあかすに畧して三つの相あり、つまびらかに観すべし。一つに

は不淨の相、二つには苦の相、三つには無常の相なり。一つに不淨は諸々のけがらわしき事也。凡そ人の身の内に三百六十の骨あり。其の骨の節々相さゝへたり。(さゝゆるといふはもち合せくさりつぐ事なり) 先づ足の指の骨は足の骨をさゝへ、足の骨はつぶしの骨をさゝへたり。つぶしの骨ははぎの骨をさゝへ、はぎの骨は膝の骨をさゝへ、膝の骨は臀の骨をさゝへ、臀の骨は尻げたの骨をさゝへ、尻げたの骨は腰の骨をさゝへ、腰の骨は腰椎部の骨をさゝへ、腰椎部の骨は肩の骨をさゝへ、かたの骨は肩胛部の骨をさゝへ、うなじの骨はをこがいの骨をさゝへ、をこがいの骨は牙齒をさゝへ、其上に髑髏あり。又肩胛部の骨は肩の骨をさゝへ、肩の骨は肘の骨をさゝへ、ひじの骨は腕の骨をさゝへ、腕の骨は掌の骨をさゝへ、掌の骨は指

の骨をさへたり。斯くの如く轉ト次第してくさり合せたり。三百六十の骨集まりて人の形なる事。例へばくち破れた家の如し。諸々の節さへ持ちて四つのほそき脉五百分の志、むらを普く巡り當り茂りなをし泥塗の如し。六脉あいかけて五百のすまごひ、七百の細脉あみまごひ、十六の麓脉くさりて相連ねたり。二つの志、むらの繩あり。長さ三尋半内よりまごひ結べり。十六の腸胃は生熱の臟をまごふ。二十五の氣脉は猶し窓隙の如し。百七の關は恰も破れ碎けたる器の如し。八万の毛の穴は亂れたる草を以て覆へるが如し。五根七竅に不淨の物満みてり七重の皮を以て包み六の味を以て養ふ。猶一生あくこそなく貪る心絶へざるなり。斯の如くなる身は一切臭くけがらわしく自性ついへだたるなり。誰か茲に於て寵愛

し憍慢せん。又曰く腹中に五臟有て漸々あいおほいなびきあひて下へ向へり。其の形蓮花の如し、孔竅空疎にして内外相通せり。各々九十重あり。肺の臟は上にあり。其色白と、肝の臟は青と、心の臟は中央にあり、其色赤と、脾の臟は黄なり、腎の臟は下にあり。其色黒と。又六腑あり。大腸は傳造の腑とす、又肺の腑たり長さ三ひろ半、其色白と、膽は清淨の腑とす。又肝の腑たり其色青と。小腸は受盛の腑とす。又心の腑たり長さ十六ひろ其色赤と、胃は五穀の腑とす。三升の糞中にあり。其色黄なり。膀胱は津液の腑とす。又腎の腑たり、中に一斗の尿あり、其色黒と、三焦は中瀆の腑とす。斯の如くなるもの、縦横にわかちして大腸小腸赤く白く色を交へて十八廻り廻りて毒蛇のわだかまるが如し。又頂より趾に至り

髓より膚に至りて、八万の戸虫あり。四つの頭四つの口九十九の尾あり。其の形一つに在らず。一々の戸に又九万の細かなる虫あり。うの毛の先よりも少さし。寶積經に曰く、始めて胎内を出ずより七日を経て八万の戸の虫身より生じて縦横に喰ふ。二戸の虫あり。紙髪と名く、髪根に住して常に髪を喰む。又二つの虫あり。繞眼と名づく。眼に住みて常に眼を喰む。又つ四の虫腦に住みて腦を喰む。稻葉と云ふ虫耳によりて耳を喰む。藏口と云ふ虫鼻によりて鼻を喰む。又二つの虫あり、一つをば遙擲と名づく。唇にありて唇を喰む。又一つの虫を針口と名づく。舌にあつて舌を喰む。五百の虫は左の邊を喰み。又五百は右の邊より喰む。四つの虫は生臟より喰む。二つの虫は熱臟より喰む。又四つの虫小便道に住みて尿を喰む。

又四つの虫大便道に有て糞を喰む。又黒頭と云ふ虫脚に住みて足を喰む。斯の如く八万の戸虫此身に寄り止まりて、夜晝喰み食ふ。身を熱しなやませ心に憂ひあらしめ、諸々の病を起す良醫もよく除きいやす事なし。經に云ふ人正に死せんとする時諸々の虫おじをそれて互ひに相喰み食ふ。此故に諸々の苦痛を受く。茲に於て男女眷族大きに驚き悲しむ諸々の虫相食ひ盡きて只二つのむし残り七日の間食ひ合ふ七日過ぎて一つのむし命盡きて一つのむし猶有り又假へ上膳の衆味を食すれ共、宥を逕ぬれば皆不浄となる假へば糞穢の大小共に臭きが如し。此身も又然なり。幼なきより老に至り只是不淨なり。假ひ大海の水を傾け洗ふとも、いさぎよき事なし。外にはうるわしきよそをひをほごすも、内には諸々の不淨を包む。

猶畫ける瓶に糞穢を盛たる如し。禪經の偈に曰く、身臭く不淨なりと知れども、愚者は殊更に愛惜す。外の顔色をのみ見て内不淨を觀せずと云へり。況んや、また命終りて後塚のあいだにすつ一日二日乃至七日經ぬれば、其身腫ふくれて色替り、青みじみ臭くたゞれて皮解け、膿血流れ出づ。鷲鷲鳥狐狼種々の鳥獸つかみさき食ふ。鳥獸食ひて後不淨に潰れたる大より、無量のむしけら臭き處へ交はり出づ人はをきらふ事死したる大よりも劣れり。鼻を覆ひ過ぎける。乃至白骨となりぬれば、節々のつがいはなれて手足髑髏此處彼處にちりちりに風に吹かれ日にさらし、雨に注ぎ霜結びて白骨も色替り、遂に朽ち碎けてちりに交はり土となる。白樂天が詩に曰く、西施が顔色今何處にか有る。白骨と名づけて終に郊原に朽ぬ。

正に知るべし。此身は終始不淨なり愛する處の男女皆斯の如し。誰か智有る人更に愛着をなさんや、故に山觀に曰く、未だ此相を見ざれば、愛染甚だ強し。若し是を見れば慾心凡て止み、僅かに忍ぶに足らず。假へば糞を見ざるごきは、猶能く飯を食ふ。たちまち臭氣を聞きつれば、即ち嘔吐くが如し。又曰く若し此相を現はせば、高眉翠眼皓齒丹唇も一むら屎粉を其の上をへるが如し。又たゞれたる屍にかりに紅粉を附けたる如し。尙眼にも見ざれば況んや身に近づけ歡抱姪樂せんや斯の如くなる相は是姪慾の病の大黃湯なり。二つに苦と云ふは、此身始めて生れしより、この方常に苦惱を受くるなり。寶積經に説給ふ如し。若くは男子もしくは女子始めて生れ落つる時、或は手にて捧げ、或は衣を以て抱く、或は夏の暑

氣冬きふゆは寒風さむかぜ身にみふれて大苦惱だいくのうを受うくる事こと、生うまれたる牛うしの皮かわをはぎ垣壁こうへきにふ
 る、如ごとし。長大ひととなり後のち又また苦くのふ多おほし。同おなじ經きやうに説とく、此身このみを受うて二種しゆの苦く有あり
まなこみはなしたのんどきばむねはらてあし、もろく、やまい、しやう、かく、ごと
 眼耳鼻舌咽喉まなこみ牙齒胸腹あし手足あしに諸々の病びやうを生なず。斯かくの如ごとく四百四病びやう其そのの身みを
 責せめ之これを内苦ないくと名なづく。又また或あるは牢獄ろうごくに有ありて種々しゆんぐ糺明きやうめいの責せめを受うけ、或あるは
 耳鼻みをそがれ手足あしを切きらる。諸々の惡鬼あくき惡神あくじん其そのの便たよりを得えてなやましめ又
 蚊ぶん蠅もう蠹ほう蟻たい種々の毒どくの虫刺むしし食くらふ。寒熱かんねつへ耐たへ難がたく飢渴うへく事ことしきりな
 り。雨風あめかぜにをかされ霜雪しもゆきはだへに通とり。種々の苦惱しゆんぐ身にみせまる物ものじて此五
 隱いんの身みは一々の威儀いぎ立居たち起おふし、皆みな悉ことごとくく苦くに在あらざる事ことなし。又また永ながしな
 へに行歩あるき暫しばらくも止やまず。是これを名なづけて外苦げくと云いふ。此外このほか諸々の苦くの相目さうめの
 前まへに見みつべし説とくことをまつべからず。三つには無常むじやうと云いふ涅槃ねはん經きやうに曰いわく人

の命いのちは若ごとく止とまらず。山水さんすいよりも速すみか也なり。今日きやうは永ながらへたりこても
 あすまた保たもち難がたきなり。土曜どよう經きやうに曰いわく、今日きやう既に過すぎぬれば命いのち又また從したがひ減へり
 て少ちひさなる駒こまの爪つめのたまり水みづに住すむ魚うをよりも猶なほはかなし。是これ又また何なにか
 樂たのしまんや摩耶まや經きやうに曰いわく、假たとへば梅陀羅せんだらの牛うしを駢かり屠ころす所ところに至いたる時とき、一足宛あしづつ
 行ゆくに連つれて、此牛このうし死地ししちに近ちかづく人ひとの命いのちも又また斯かくなり。(已上たと心こころをこる)假たとへ
 壽命じゆめう長遠ちやうえんの業ごうあつて子孫しそんあまたかしづけ、今日きやうは此子このこの花はなの會かい、明日あすは
 其そのの子この月見つきみとて、左さも重寶じゆうほうに孝行こうかうに愛あいせられ、あわれあやかり物ものかなこ
 他たの人ひと々にうらやまれ、誠まことにいみじかりしも元もとより無常むじやうのならひにて、若も
 しも又また孫子まごの内うち、一人二人ひとりふたりと飲かぬれば遅おくれ先立さきだつ事ことをなげき、却かへつて長命ながいき
 をうらみ、是これより老をいの涙なみだ催もよほしてよりよく、其身そのみおころへ終ついに無常むじやうをま

ぬがれざる媒なかだちとなりければ、入り前まへまき淋しみき人も有り、假たとへ富貴ふうきの報ほうを感じつゝ、富とみは屋いへをうるほわと家いへのううくくしく賑にぎはひて、東ひがし西にしに薨いらかを竝ならべ、南なん北ぼくはるかに冥めい迷したり。美人びじんの諷うたふ聲こゑ長閑のどかにして春はるのひかりゆううくくたり。又また霓裳げいしやうのまひの袖そで颯さつ々つ翻ひるがへして秋あきの氣色けしき凄せい々つたり。然しかかわ有ありしも何時いつにかに時移ときうつり人變ひとかわりて昨日きのうの夢ゆめなるもあり。大經だいきやうの偈げに曰いわく、一切いっさい諸しよ々の世間せけんに生しょうずるもの皆死みなしにき頃ころ壽命じゆめうはかりなきも終ついに終をわりあり。其それ盛さかりなるものも必かならずをころへ逢をふものは定さだめて分わかれ有あり。夫それ盛さかりなる年としも久ひさしくごまらず、うるわしき色いろも病やまひに犯をかされ命いのちは死ための爲のまに吞のまる法ほうとして常つねなるものなし。又また罪業ざいごう應報おうほう經きやうに曰いわく、水みづは落なごに常つねに満みたず、火ひは盛さかんにして久ひさしく燃もへず。日出ひいでて須臾しゆゆに入り、月つき満みちて既すでに又また飲かぐ、位くら貴いたつと榮さかへ

まします人ひとにても無常むじやうは早はやく競きそひきて、又また此人このひとにまさりたり。唯たゞ同をなじくは信心しんじんに無上むじやう尊そんを禮らいすべし（已上心いじやうしんをころ）唯たゞ諸しよ々の凡夫ぼんぶのみ無常むじやうを恐おそるゝにもあらず、仙人せんじんに至いたりつゝ、風かぜにのり、雲くもに座ざし、飛と行ひやく自じ在ざい遊樂いうらくす、況いはんや、又また仙境せんきやうは四時じとこし永えいなへに花はな咲さきて四山しよさん芬ふん々くかうばしく命いのちの限かぎり久ひさくて此世界このせかい皆滅みなめつし天てんごも地ちごも分わからずして、泥どろの海うみとなりて、又また雨あめ土つちひらけはトまりしを七度たゞ見みたる仙人せんじんも終ついに無常むじやうをのがれ得えず、空そらに上のぼり海うみに入いり岩いわほに隠かくれたりし人死ひとしを受けざるためしなし。彼かの仙境せんきやうに樂たのしみして佛ほとけの道みちを願ねがはねば定さだめて冥途めいど闇くらくして、此六道このどうに歸かへるべし。然しかあるときは是これとても更さらに願ねがわからぬなり。唯たゞすべからく賢かしこきを賢かしこきとあがめつゝ、佛ほとけの教をへに従したがひて如説によせつ修行しゆぎやうを勵はげまして常つねに樂たのしみの果もを求もとむべし。止し觀かんに曰いわく、

無常の殺鬼と云ふものは貴人賢人を選はずして威勢ありと雖も、此身は危くもろければ、朝がをの露水の泡あだにたのもしからぬなり。いかんぞ忙然と常に安然と心安く愚かにして百年の齢をも保べき様に思ひなり。四方に走り廻りつゝ、財寶を積み貯ふ然わあれご未だ心にあきたらず。俄かに長く行きぬれば、彼の貯へし寶物空しく後に残り露ちり身に從へず。冥途に獨り趣き闇き中有の旅の空、誰又あつて善惡を弔ふ人もなかりけり。又彼の後の所領財寶未だ日數も立たざるに誰かれと分ちごり、不孝の子はなまじいに誰は多く、我少なしかくはあらと云ひ合せて口説うらみの媒となりぬる事もいごはかなし。無常の來る事は早や川の漲るながれすさまじく吹し嵐いなづまの光より尙速かなり。海山虚空市の中、のが

れざりなん所なし。斯くの如く觀念して心大きに恐れつゝ、床にねむりを安んぜず。ちんせんをも甘むぜず。頭然を救ふ如くにして、出離の道を求むべし。又曰く假へば野干の耳尾牙を失ひ、いつわりねむりてまぬがれん事を望み、忽ち頭を切られん事を聞て、心大きに驚くが如し。人亦生老病の三つに合ふて尙急にせず、死の事はゆるがせにせず。何んぞ亦恐れざる。恐るゝ心起りなば湯をさぐり、火をふむ如し。又五塵六慾むさほり染まんいごまなし。(已上意をこるなり)人道斯くの如し。實に厭離べし

第五 天道の事

夫れ天道に三つあり、一つには欲界二つには色界、三つには無色界也。其

の志すなす既にひろ廣くして、つまびらかに述のべ難がたし。忉利天とうりてんを明あかして又また其外そのほかをなぞらへん。先まづ天人てんにんの有あり様さまは萬よろづ心こころに叶かなひつゝ、樂たのしみかぎりなければも命いのちの終をわりになりぬれば五すい衰くるの苦まぬしみ免まぬがれず。一つには花かう鬘つら忽たちちに志ほみ、二つには天てんの羽衣はころも塵垢じんくに穢けがれ、三つには腋わきの下したより汗あせ出いづる。四つには兩り眼やうしばくめくるめき、五つには本ほんの住すみかに樂たのします。是これを五すすいご名なづける。此この苦くるしみあに合あひぬれば天女てんじよ谷族ざく悉ことごとくいご遠とざけ捨すけり。草くさむら木この間まに伏ふし轉まろび泣なき悲かなしむ。あわれなる此この時ときなげきて云いひけるは、此この諸もろ々の天女てんじよをば我わが身み常つねに愛あいせしに如何いかんぞ。今いまはなさけく草くさを捨すつるが如ごとくにて、露つゆばかりもあわれまらず。今いまは早はや頼たのむべき方かたなし。誰たれか又また我われを救すくわんや、善見ぜんけんの宮城きやうじやうを去さりて玉たまの緒をたへぬべし。帝釋ていしやくの

寶座ほうざにてまみへむ事こともよしなや、殊勝しゆしやう殿でんのたへなるをもなく見難みがたく釋しやく天寶象てんぼうざういつかごものにのりなん。衆車しゆうしや苑えんの花はなをも我われ又またながめやわせん雜林苑ざうりんえんの酒宴しゆえんにゑぞ袖そでを連つらねまじ、觀喜苑かんきえんの中うちには遊あそび止とどまるべからず劫波樹こつぱじゆのもごなる白玉はくぎよくの面石めんせきに座ざする事こと更さらになく、殊勝池しゆしやうちの水みづにゆあみする思おもひなし。四種しゆの甘露かんろも何なんぞて食しよくせん。五妙みやう音樂えんがくをも我われのみきかず悲かなしきかな、自みづから一人ひとり此苦このらみに合あひ侍はんべり。願ねがは慈悲じひをたれ命いのちを救すくひ給たまひ、しばしの程ほどもながらへて又またも樂たのしみまいらせん。彼かの馬頭山ばづさん跋ばつ焦海しやうかいにをこさじめ給たまふなご。いごあわれに云いひらかごも、救すくふものぞなかりける。(六はりみつ經の意)此この時ときの苦くるしみは、地獄ぢじやくよりも甚はなはだだしく誰たれもこりぬべし。されば正しょう法ほう念ねん經きやうにも天上てんじやうよりさりなんごしけるご

き、大苦惱を生ず。地獄の衆苦に比ぶれば、此苦しみ強くして、十六が一つより地獄の苦は軽きなり。又大徳の天人生ずれば、元の天女眷族は此人を振りすて、大徳に従ふ也。或は威徳ある天人の心に従はざるものをば宮中をかり出し、終に住まいを止めてけり。其外五つの欲天にも皆悉く苦げんあり。又上界の二天には斯くしなは無けれども、天上を退ぞける其苦しみぞありける。乃至悲相天までも、阿鼻の業をまぬがれず。然るときは天上の樂しみも、更に又よしなし。六道の其の内何れか愚ならずや。唯願わしき西方の不退のうてななるべし。

第六 六道の厭相を結ぶ事

つらく惣じて厭相を觀するに、一箇ひごへに苦しめり。耽り荒むべか

らず。四山合來りてのがれざりなん處なし。然るに貪慾愛念のくせ物が、自ら心を覆ひ深く五慾に着して、常なきを常に思ひ、樂にあらぬ樂を思ふ。彼の癪をあらひ睫を置くが如き。なんぞ、いごわざらんや。況んや又程もなく刀山火湯きたるべし。誰か智あるもの此身を愛し寶とせんや。されば正法念經にも、智者は常に憂ひを抱きて獄中の囚人に似たり。愚人は常に觀樂として猶も、光音天の如しと云へり。誠に此娑婆世界は獄中なり。彼の安養極樂は本國なり。急ぎ娑婆の獄中いごひ、免れて極樂の本國へかへるべし。寶積經の偈に曰く、しゆくの惡業を作りにて財物を求め、妻子を養育して喜び樂むと云へども、命終るとき苦しみ身にせまれども、妻子救ふ事なし。況んや三途の恐しき中にては妻

子智音のものを見づ。馬車財寶もやがて人の物ごなし。三途の苦を受くる
 とき誰よく苦を分けて、受けたるためしあらばこそ。一度死してさりぬれ
 ば、父母兄弟妻子朋友僮僕珍財一つも来り親しまず。唯惡業のみ常に
 從ふ。乃至閻魔王罪人に告げ給はく、我少しの罪にても汝に加ゆる事な
 し。汝自ら罪を作りて、自ら茲にきたれり。業報自ら招きて罪に代
 るものなし。父母妻子も救ふ事あらず。只自ら出離の因をしゆすべし
 と云へり。此故に手かせ首かせの業を捨て、惡道を遠く離れて安樂を
 求むべし。大集經の偈に、妻子珍寶及王位も命終る時にのぞみて
 從はざるものなり。只戒を施さふ放逸ご、今世後世の伴ごなるご云へり。
 斯くの如く展轉して惡を作りて苦を受け、いたづらに生じ、いたづらに臨

轉極をりなご。經の偈に、一人の一切の中に受くる處、諸々の身骨常
 に積りて腐り破さりしかば、毗布羅山の如くならんご云へり。一切さへ
 然をれば況んや、無量劫をや。我等未だ道を終せざる故に、徒に無量
 劫を経たり。若し今世も務め終せずば、未來又然なるべし。無量生死の
 内にも甚だ人身を受難む。例へ人身を受けても、諸根を具し難む。假
 へ諸根を具しても、佛教に合ひ難む。假へ佛教に合ふても、信心起し難
 し。されば大經に曰く、人間生ずるものは爪の上の土の如く、三途に
 落つるものは十方の土の如し。法花經に曰く、無量無數劫にも此法を聞
 き難し。又此法を聞ごも、此人又有難しごなり。然るに今たまく人身
 を受け、有難き佛教にあひぬれば苦海を離れて、淨土に往生せん事只

今生こんじょうにあり。さあるに我等われらが頭かしらには霜雪しもゆきを戴いたぎて、俗塵ぞくちんに心こころを染そめ
 一生しじょうは盡つきれども希望きぼうは盡つきず。終つひに白日はくじつのもこを去こりて、一人ひとり黄線こうせんの底そこに
 入りなば、多百たひやく踰ゆう繕ぜん那なの銅燃どうねん猛火もうかうかの中に落おちて、天てんに呼よはり地ちをたゞくこ
 云いふとも、何なんの益えきあらんや。願ねがわば諸々もろくの行者ぎやうじや早く厭離えんりの心こころを起おこし
 速すみやかに出離しゆつりの道みちに從したがふべし。寶たからの山やまに入りて、空ひなしく歸かへる事ことなかれ。
 或ある人間ひととらて曰いわく、何なんの相そうを以もつて厭離えんりの心こころを起おこすべきや。答こたへて云いふ。
 若もく廣ひろく觀かんぜんと思おもはる前のまえ所說しよせつの如ごとく、六道どうの因果いんが不淨ふじよう苦等くとうなり。或
 は又りうじゆ龍樹りゆうじゆ菩薩ぼさつの禪陀迦王ぜんたかおうに勸すすめ給たまふ偈げに曰いわく。此身このみは不淨ふじよう九孔くかうより流ながれ
 て、河海かかいの極きわまり止やむ事ことなきが如ごとく。うすき皮覆かわをひかへして清淨せいじように似にた
 り。猶なほ錦繡きんしゆう瓔珞やうらくをかりて装よそほひかざる諸々もろくの智ちある人ひとは、偽いつはりたぶら

かす事ことを知しりて色慾しきよくを捨すつ。假たとへば疥たけがきあるもの強つよき火ひに近ちかづけば、始はじめ
 は心良こころよけれ其後ごのちには苦くを増ます。愛慾あいよくの相そうも其その如ごとく、始はじめは樂たのしめども、
 終をわりには憂うれひ多をし。身みの實相じつそうは皆みな不淨ふじようなりと知る事ことは、是これ、空無我くうむがを感かんず
 る也なり。此觀このかんを修しゆするものは、利益りやくの中の無上むじようなり。其様そのさま優すぐれ他門たもんなりとも
 戒行かいぎ實智じつちなき人ひとは猶なほ禽獸きんじうの如ごとく、形醜かたちみにくく賤いやしくして、聞見もんけん少すくなしと
 雖いへども戒智かいちを修しゆするものを勝上せうじようと名なづく。利衰りすいの八法はうは、まぬがるもの
 なし。若もし貪慾どんよくを除限じよげんせば、誠まことにたぐひなき殊勝しゆじようの人ひとなり。或あるは諸々もろく
 の沙門しゃもん婆羅門ばらもんあらむに父母ふぼ妻子さいし及び眷族けんぞく、かこころの意したがことばを受けて、
 廣ひろく不善ふぜん非法行ひほうぎやうを爲なす事ことなかれ。假たとへ是等これらの爲ために諸々もろくの果かを起おこすとも、未
 來らいだいく大苦たいくは唯身たゞみのみ受うく。夫それ衆惡しゆうあくを作り即時そくじには報むくひざれば、其儘そのま刀火とうか

來りて、そこない割く如くなる事はあらざれ共、臨終に罪相始めて現はこ
 て後には地獄に入りて諸々の苦を受くるなり。信心と持戒と多聞と智慧と
 慙愧と不放逸との七つの法を聖財と名けて、並もなき眞實の寶なり。如來
 の金言なり。最も世間のものろくの珍寶はるかに勝れり。足りぬと知れば
 まづしと雖富となづくべし。寶有とも欲多きはこれを賤しと名く財寶
 多ければ、諸々の苦を増事。假へば龍のかしらおほきは酸毒をますが如し
 美味は又毒藥の如しと、觀して智慧の水を以て注ぎきよむべし。此身を
 保たん爲に食を用ゆと雖も厚味を貪り、口腹を養ひて心を害す事勿れ。此
 故に少を養ふて大を失ふ事勿れ。孟子もいましめ給へり。又麗服なり
 と云へども肌へを隠し、寒を防ぐに足れり。何ぞ好色を貪り、僞慢を長せ

んや。惣じて内心の徳を貴ぶときは、外物自らかろくして人の錦繡を
 もうらやまず、をのが弊衣をもはづる事なし。されば論語にも道に志し
 て悪衣悪食をはじめるものは、未だ友にはかるたらずと云へり。かのかんや
 うきやうの三百餘里に、ふくゑんして天日をきやく離したりも、安んず
 る處は膝をいゝに過す。柴のいほりのあやしきも、其相を見ざる時は、
 法界ひこしく道場にて心廣く體寛なり。誠に宮もわらやも、はてしな
 ければ善惡引の、山うばが山巡りするぞ苦しきと、一節うたふ事までも、
 心の夢さめずして生死輪廻を離れ得ぬ。其有様をなぞらふなり。諸々の
 欲染に於ていたふ心を生じ、務め勵まして無上涅槃の道を求むべし。先づ
 此身を調和し安隱にして、其の後齊戒を修すべし。一夜を分つに五時あり

其の内二時は眠に附きて休息し、初中後夜の三時は生死を觀し、勤めて度を求むべし。空しく過ぐる事なかれ。假へば少しの鹽を恒河に置くに、其の水鹹味になす事ならざるが如く、微細の悪は諸々の善に合いぬれば、消滅して散壞する事又斯の如し。梵天の離欲の樂を受くるも雖も、却つて無間の熾燃の苦に落ぬ。天宮に居て身より光明を放つも雖も、後には黑闇地獄の中に入り、所謂黑繩地獄、等活地獄は燒割刻剝事ひまなきなり。是等の入つの地獄は常に盛んに燃ゆる事、皆是衆生の惡業の報なり。其苦しみの有様を、もして晝にかき言葉に聞く、或は書を讀みて是を知り、思ふ間さへ忍び難し。況んや又己れが身に觸んや、若く又人有つて三百の矛釵を以て其の身を切らんに、阿鼻地獄の一念の苦に比べれば、百千萬

に割て其の一つにも及ばずと云へり。畜生の中に於て其苦無量なり。或は繋ぎ縛られ、及び鞭打たる者あり。或は明珠羽角骨毛皮肉の爲に殘害せらる。餓鬼道の中の苦又稱なり。諸々の願ひ求むる事心に叶はず、飢渴にせめられ寒熱に苦しみ疲れ乏しく、是等の苦甚だ無量なり。屎尿糞穢の諸々の不淨をさへ、百千萬劫にも是を得て食ふ事なし。例へ亦たましく少し計りの食物を求め出して食わんごすれば、餓鬼互ひにかすめ奪ひて散り失せぬ。清涼の秋の月にも焰熱を憂へ、溫和の春の日にも轉寒苦あり。園林のもごに越けば諸々の菓盡き、清淨の流れに至れば忽ちに枯れかわく罪業の縁によりてあまつさへ命長く一万五千歳を経て、諸々の痛む毒を受けて暫くもすき間なく、一つも飲ぐる事なし。皆是餓鬼の果報煩惱のはや

かわしゆじよう たいよ 悪くねんしん びさか 燃へて 身心をや 焦す。斯くの
 き川 衆生を漂はし、惡念嗔恚の火盛んに燃へて身心を焼き焦す。斯くの
 如くなる 諸々の塵勞を滅せんと思はゞ、眞實げ脱の道を修して、諸々の世
 間の假名の法をはなれ、清淨 不轉の所を待べし。若厭離の相を存せば馬
 鳴菩薩の妓女のうたふ聲を聞いて、唱へて云へる如し。有爲の諸法はまほ
 ろしの如く、化くるか如し。三界のきづなは一つも樂しむ事なし。王位高
 顔にして勢力自在なるも、無常主りぬれば誰か又ながらへん。浮べる雲の
 あるに似たりと雖も、しばしが内に消へて無きが如し。此身は虚偽なる事
 ばせをの如し。怨たり賊たり。したしみ近づくべからず。毒蛇の篋の如し
 何れの人か愛樂せん。此故に諸佛常に此身を呵し給ふ(已上)此偈の中に
 具に無常苦空無我をのべたり。是を聞く物道を悟る。又堅牢比丘の壁上

の偈に曰く、生死の絶へざる事は諸々の貪欲ふかく、色にふけり、あぢわ
 いを嗜む故なり。怨を養ふて塚に入り、空しく諸々の辛苦を受く。身の
 臭き事かばねの如し。九つの穴より不淨ながる、厠の虫の糞を樂むが如
 く愚にして身を愛し貪るも是に異なる事なし。相を止めてみだりに分別す
 る時は、即ち是五欲の本なり。智者はみだりに分別せざれば、五欲即ち斷
 滅す。邪念より貪着を生じ、貪着より凡のふを生ず。正念にして貪欲な
 ければ餘の煩惱も亦盡ぬ(已上)過去の彌樓健駄佛の滅後に、正法めつせし
 時に陀摩戸利菩薩此の偈をもこめゑて、佛法を述べ廣め無量の衆生を利
 益せり。若し極樂を願はゞ金剛經に云ふが如し。一切有爲法如夢幻泡
 影 如 露亦 如 電 應 作 如 是 觀 又 大 經 の 偈 に 曰 く、 諸 行 無 常 是

生滅法生滅々已寂滅爲樂(已上)祇園寺の無常堂の四つの角に釣
がねあり。かねの音の中に又此の偈をさく、病僧鐘の音を聞いて清涼の
樂しみを得る事、三禪定に入るが如くにして淨土に生ず。況んや又雪山
の居士は全身を捨て此の偈を得たり。行者偈の心を能く工風して、忽が
せにする事勿れ。説の如く勸察して貪瞋癡等の惑ひの業を離る事、獅子
の人を追ふ如くにするべし。外道のむやくの苦行をなして、愚なる狗の塊
を追ふ如くにするべからず。問ふて曰く不淨苦無常は、其義を悟り安し。諸
法は目の前に現はれて法體あり。何ぞて空を説けるや。答へて曰く、豈經
に説ずや。夢幻化の如しと、かるが故に夢の境に例して空の義を勸むべ
し。西域記に云へるが如し。波羅底斯國の施鹿林より、二三百里東に涸池

あり。昔一人の隱士此の池の邊りに、庵をむすび暮居たり。此隱士廣く技
術を習ひ神理を極めて、五磔を變じて寶さなし。人を蓄生になし、蓄生
を人になす。但し風雲に乗り仙駕に侍べる事未だならされば、圖を開き古
へを考へて、仙術を求めしに其仙法に曰く。一人の烈士に命じて長刀を
持壇のすみに立て、いきざしをせず無言にして、夕べより朝に至らしめよ
又仙術を求むるものは、壇のまん中に座して長刀を手に持ち、口に神呪
をじゆして目に見る事なく、耳に聞く事勿れ。明ほのに及んで仙にのほら
んと云へり。終り仙法にまかせて、一人の烈士を求め出してまばくまひ
なひを、あつくしてひそかに恵み行ふ。隱士の曰く、願くば一夕聲せざれ
かし。烈士是を聞いて芳命ならば、死なん事をさへ尙辭せざらまし。まし

てや息を屏んことをやと云ふ。茲に於てたむちやふを設け、仙法を受けて
 法に任せて事を行ひ、座して日の暮るゝを待ち、日暮れて後に各々の其
 務を司ぐる隠士は神呪をじゆし、烈士はもの切の刀を持って、漸々明がた
 に及んで彼の烈士聲を上げて叫ぶ。其時隠士問ふて云ふ。汝警する事勿れ
 と戒めしに、何んぞ驚き叫ぶや。烈士答へ曰く、君が命を受けて後夜分
 に至りて、惛然こ心亂れて夢の如く、氣色變じて物あやし。更に起き上
 りて見れば、昔使へし主人自ら來りて慰めたる。然れども君が厚恩を荷
 ふ事を感じて無言を破らず。答へ語らざれば彼の人多きに怒つて、終に
 殺害せられ、中有の身を受け屍をかへり見て、此の事を遂げず。斯くなり
 ぬるご名残をしく、猶も願はくば生々世々を経るごも、物言はずして厚德

を報せんご誓ひ、終に南天笠の大婆羅門の家に生を寄せたり。胎を受け
 胎内を出するに、種々の苦患をふれごも、芳恩を忘れずして聲を出さず。
 家督を受け元服よめごり、親をはふむり喪を務め、子を設くる迄物言はず
 宗族外戚皆是を怪しむ。年六十に餘りて我が妻の曰く、汝物云ふべし。
 若し物言はずんば汝が子を刺殺すべし。ご稚子を抱き釵を引さげたり。其
 時吾心中に思ひける。既に生を替へ世をへだてたり。自ら省れば年老
 へ、をころへて只此稚子一人なりご、忍び兼て妻をこゝめ、殺すなく
 と云ひて終に聲を上げたりご語る。隠士是を聞て是魔のなやませるのみ。
 我あやまりなりご後悔す。烈士は恩をかんじて此事を成就せざるを悲しむ
 無念なりごいきごうりて死す(已上畧抄)夢のさかる斯の如し。諸法も又然

なり。未だ妄相の夢さめざるさきも、空に於て有さず。かるが故に唯識論に曰く、未だ眞の悟を得ざれば、常に夢の内に居れり。故に佛説て生死長夜さし給ふ。問ふて曰く、若し無常苦空等の觀をや。答へて曰く、此觀は小乘に限らず、大乘にも通ずるなり。法花經に云ふ如し。大慈悲を室ごし、柔和忍辱を衣ごし、諸法の空を座ごして、是に居りて説法をなす(已上)諸法の空の觀尙大慈悲心を防げず。如何に況んや、苦無常等の觀念は菩薩の悲願をもよほすをや。此故に大般若等の經に、不淨等の觀念を又菩薩の法ごなす。若し知らまほしくば更に彼の經文を讀むべし。問ふて曰く、斯くの如くの觀念には如何なる利益ありや。答へ曰く、若し常に斯くの如く心を調へ伏せぬれば、五欲少なくうすくして、乃至

臨終正念にて亂るゝ事なきにより、惡しき所に落ちざるなり。大莊嚴論の觀進要念の偈に云へる如し。年のさかりの憂ひ無き時は、怠りて進まず。諸々の事のみ貪り營みて、布施ご持戒ご禪定を修せざれば、死のため吞まるとに望みて、始めて驚き悔みて善を修せんご、求むれ共更に益なし。智者は常に觀念して五欲の想を斷ちさるべし。委しく務め勵まして心を習はしたる者は、命の終りに及びても悔み恨むる事無く、心意既に專一にして錯亂の念ある事なし。心を習はず事專一にあらざれば臨終に至りて心散乱す。

往生要集中之卷終

昭和十五年五月二十日印刷納本
昭和十五年六月一日發行

惠心僧都著述

發行人

下關市大字豐浦町金屋
林 照 之 進

印刷所

下關市東大坪町二七四
下 關 刑 務 支 所

印刷人

下關市東大坪町二七四
海 田 信 行

發行所

下關市大字豐浦町金屋
正 林 堂 書 房

【往生要集中之卷與附】

403
132

終